



ドイツ 新政党「左翼」の誕生

夏目 雅至

ドイツの左翼党 (Die Linkspartei) と「労働と社会的公正のための選挙対案」(WASG) の2政党は6月16日、ベルリンで党合同のための党大会を開き、新政党「左翼」(Die Linke) の創立を決定した。東西ドイツ統一後、初めて社会民主党 (SPD) より政治的に左を標榜する全国的な政党が誕生したことになる。新党の党員は約7万2千人で、ドイツで3番目の党員を擁する政治勢力となった。「左翼」は7月4日に公表されたエムニト、フォルザの2つの世論調査で支持率14%を記録、連邦議会 (下院) 内野党第一党の自由民主党 (FDP) を上回った。新政党は歴代政権が新自由主義的な政策を進める中で生まれた。「社会的欧州」を守るドイツ国民のたたかいのなかでの「左翼」の役割が注目されている。

●民主的社会主義党 (PDS) の歩み●

新党創立の基盤の一つとなった左翼党は、民主的社會主義党 (PDS) が2005年の連邦議会総選挙にWASGと統一選挙名簿で臨むために党名を変更した政党だ。略称を「左翼」(die Linke) とし、従来からの支持者への配慮から、地方や状況によってはPDSの旧党名を併記し、左翼党・PDS (die Linkspartei. PDS)、あるいは左翼・PDS (die Linke. PDS) とともに名乗った。

PDSは、1989年に崩壊した東ドイツの旧政権党、社会主義統一党 (SED) を前身とする。東西ドイツ統一の中で、ホーネッカー国家評議会議長ら旧幹部を追放して、新指導部の下に再出発、SED・PDSの名称を経て、90年にPDSの党名となった。340万人と言われたSED党員で、こ

の時点で党にとどまったのは28万5千人だった。

小選挙区比例併用制で行われるドイツの連邦議会総選挙では、比例票の得票率5%未満の政党には比例議席が配分されない。ドイツ統一後初めて行われた1990年の総選挙では同党は全国では2.4%の得票しか得られなかった。しかし、比例票を旧東西ドイツそれぞれで集計するという一回限りの特例措置によって、小選挙区での1議席を合わせ17議席を獲得した。次の94年の総選挙では4.4%の得票だったが、ベルリン東部の小選挙区で4人を当選させることで、3人以上当選すれば比例票が5%未満でも議席配分を受けるという規定に基づき、30議席を確保した。しかし得票率が5%に満たないことを理由に連邦議会で院内会派としては認められなかった。

同党がこの5%条項をクリアしたのは98年の総選挙だった。同党は5.1%を獲得、一躍36議席を確保した。翌99年には欧州議会選挙で5.8%を得票、ドイツから初の左翼議員を送り込んだ。

しかし、2002年連邦議会選挙ではPDSは4%の得票率しか得られなかった。しかも旧東ベルリンの小選挙区が旧西ベルリンと統合したことなどから小選挙区でも2議席しか確保できず、比例議席の配分を受けることができなかった。議席はこの小選挙区2議席のみとなり、会派資格も失うという苦境に立たされた。この後の04年の欧州議会選挙ではPDSは6.1%を得票しているが、こうした不安定な状況から抜け出す上でも、全ドイツに影響力を持つ政党になることが、PDSにとって課題となっていた。

国際・国内動向

●旧東独全面批判の綱領採択●

この間、PDSは93年に、「世界観上の複数主義」を原則とし、「東独社会主義の失敗はソ連モデルの失敗と結びついている」とする新綱領を採択した。03年には、SEDを「社会主義の理想は独裁と抑圧の正当化によって傷つけられた」と全面的に批判し、党の目的として社会の民主化、自由、社会的公正などを掲げる綱領を採択した。PDSはドイツ軍の海外派兵に一貫して反対し、北大西洋条約機構（NATO）などの軍事ブロック解体を主張した。

同党は旧東独部では、各種の選挙で20%前後の得票を得るまで信頼を回復してきた。ベルリンを含む6州に州議会議席を持ち、2州では第2党の地位を占め、市町村議会議員約6,500人、市町村長約130人を擁す。ザクセン・アンハルト州では94年から02年まで社会民主党（SPD）少数政権を事実上支持する「寛容」という形での州政治参加の経験を持つ。98年から02年まではメクレンブルク・フォアポンメルン州でSPDとの連立政権を2期維持した。首都ベルリンでは01年から現在までSPDとの連立が続いている。しかし、旧西独部では市町村レベルの選挙では一定数の議席をもっているが、州議会への進出は阻まれていた。

同党への政治的な差別も続いた。98年総選挙で連邦議会会派資格を獲得した後も、ビスキー氏は慣例で全会派に当然配分される副議長選出を阻まれた。会派代表の諜報機関監視のための委員会への参加も拒否された。会派議長となったギジ元党首が旧東独政権時に国家秘密警察、国家保安庁（シュタージ）の非公式協力員だったという攻撃も続いた。内務省所轄のスパイ機関、憲法擁護庁は、党内の一部組織をネオナチや過激派と同様の基本法違反の調査対象に置き続けた。

●「労働と社会的公正のための選挙代案」の誕生●

2期続くSPDと90年同盟・緑の党のシュレー

ダー連立政権は、グローバル化のなかでドイツの国際競争力を強化するためとして、雇用、社会福祉、健康・医療保障改悪の「アジェンダ2010」政策や失業保険制度改悪などの労働市場政策「ハルツ改革」を打ち出した。この新自由主義的な政策への批判、反発が国民の間で広がった。反対運動は04年夏から、ドイツ全国で「月曜デモ」として高揚した。旧西独部では、この運動を基礎にして労働組合活動家やSPD元党员によって政党としてのWASGが翌05年1月、正式に発足した。WASGは、同年5月末のノルトライン・ウェストファーレン州議会選挙に挑んだが、2.2%しか得票できず、議席を獲得できなかった。この選挙でのPDSの得票率は0.9%だった。

●統一名簿でたたかった05年総選挙●

SPDは、この州議会選挙で大敗し、39年間維持してきた州政府をキリスト教民主同盟（CDU）に明け渡した。SPDはそれまでの各州議会選で敗北を重ね、州代表で構成される国会上院、連邦参議院の多数を失っていた。政策運営で窮地に追い込まれたシュレーダー政権は連邦議会選挙繰り上げ実施で局面打開に動いた。

この連邦議会選挙に当たってPDSとWASGの統一名簿による選挙協力を推進したのは、ラフォンテーヌ元SPD党首とPDSのギジ元党首だった。ラフォンテーヌ氏は、シュレーダー首相との経済政策対立から1期目の連立政権の蔵相を辞任、政界を引退していた。同氏は6月、社民党を離脱し、WASGに入党、政界復帰を宣言した。

PDSが7月中旬の党大会で党名を左翼党と改称したのは、「WASGの候補者にPDSと旧東独の歴史という重荷を負わせない」ための考慮があった。統一名簿で臨んだ9月の総選挙で、左翼党はシュレーダー政権の社会保障削減を徹底的に批判し、最低賃金の保障などの政策を提示して国民の共感を得た。選挙結果は得票率8.7%で、54人の議員を第16期連邦議会に送り込んだ。左翼党は旧西独部では4.9%、旧東独部で25.4%

の得票率を確保した。同党は緑の党を上回り、FDPに次ぐ議会内第4党となり、会派資格を回復した。会派議長にはラフォンテーヌ氏とギジ氏が共同で就任した。

この選挙でシュレーダー政権は崩壊、メルケル氏を首班とするキリスト教民主同盟・社会同盟(CDU・CSU)とSPDの大連立政権が成立した。アジェンダ2010、ハルツ改革などの旧政権の政策は基本的にメルケル政権に引き継がれた。左翼党連邦議会会派は、連立与党勢力が議席の3分の2を占める中で、社会、労働政策だけでなく、ドイツ軍のアフガニスタン派遣の増強やレバノン沖への派遣反対など平和・安全保障政策でも、他の政党が持たない独自の姿勢を貫いた。

ドイツの労働組合は東独政権党に出自を持つPDSとは距離を置いていた。しかし、この選挙中に金属産業労働組合(IGメタル)のペーターズ委員長が選挙後の選択肢の一つとして連立政権に左翼党を加えることを提唱するなどの変化が起きた。選挙後の06年1月には、労組全国センターのドイツ労働組合総同盟(DGB)のゾンマー議長とギジ、ラフォンテーヌ両連邦議会会派共同議長、ビスキー党首との会談が実現し、両者間の関係が確立した。

2つの党の組織的合同的動きは、統一選挙名簿の提起時から日程に上っていた。連邦議会選挙後の05年12月の左翼党大会は、組織合同の目標を07年6月と定めた。この間、06年9月のベルリン市議会選挙では、左翼党とWASGが分裂して臨み、敗北するという逆風もあったが、全国的には両党の合同に向けた共同の動きは進んだ。

●新党創立へ●

新党の綱領的指針となる創立文書「綱領上の

基本点」は、1年以上の討議を経て今年3月24、25の両日行われた両党の大会でそれぞれ採択された。同文書は「完成した党綱領ではまだない」としつつも、「これまでドイツになかったような党、左翼を統一し、民主的で社会的で、環境保護の立場で、フェミニズム的で反家父長的で、開かれた複数主義の、戦闘的で寛容で、反人種主義的で反ファシズムで、一貫した平和政策を追求する党」を目指すとしている。この大会を受けて行われた両党党員投票では、左翼党では96.9%、WASGでは83.9%が党合同に賛成を表明した。左翼党の党員数は約6万人、WASGは約1万2,000人であったが、党合同にあたっては両党対等が配慮された。

新党誕生前夜の5月13日に行われたブレーメン市議会選挙で、左翼党はWASGとともにたたかい、前回03年選挙でPDSとして獲得した得票率1.7%を8.4%に躍進させ、ゼロ議席から7議席に進出した。ブレーメン市議会は州と同格の自治体であり、左翼党が旧西独部の州議会に選挙で議席を獲得したのは初めてとなった。

ラフォンテーヌ氏とともに「左翼」の共同議長に選出されたビスキー氏は統一党大会で、メルケル大連立政権が進める政治を「反社会的だ」と糾弾、「一層効果的な対峙が可能になった」と新党創立の意義を強調した。PDS、左翼党に向けられていた攻撃は新党創立によって終息したわけではない。合同大会後、コッホCDU副議長は、「左翼」の影響力拡大に警戒を表明し、引き続き憲法擁護庁の監視下に置くべきだと主張した。「左翼」連邦議会会派は大会後、連邦憲法裁判所に憲法擁護庁の監視対象から外すことを求める訴訟を起こしている。

(なつめ まさし・「しんぶん赤旗」外信部)